

広葉樹資源の安定供給体制の構築

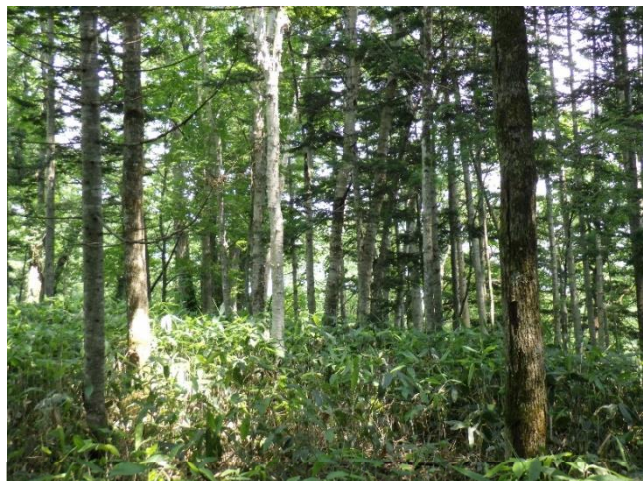
資源活用第二課

北海道森林管理局は、森林整備のため伐採される広葉樹の有効利用に取り組んでいます。

【はじめに】

北海道森林管理局が管理する国有林は約304万ヘクタールで北海道全体の森林面積の約55パーセントを占めています。そのうち約65万ヘクタールがトドマツやカラマツなどの人工林で、その多くの森林資源は成熟し、本格的な利用期を迎えています。

北海道森林管理局では、公益重視の管理経営を一層推進しつつ、地域における木材安定供給の構築を図るため、森林の機能に応じた施業の結果、得られる木材の持続的かつ計画的な供給に努め、地域の林業・木材産業の活性化に貢献することとしています。



人工林内に生育する広葉樹

【具体的な取組】

かつて、北海道には良質な広葉樹が生育していましたが、高度成長期における木材需要の高まりによる伐採で、天然林では、太く良質な広葉樹の資源量は減少しました。

一方、同じく高度成長期に造成した人工林内に

は、天然更新により発生した多くの広葉樹が生育しています。こうした人工林の成長に伴い実施する間伐などの森林整備により伐採された中小径木の広葉樹の有効利用を図るため、道内の各森林管理署において、採材・仕分けの勉強会を実施しています。



採材仕分け勉強会

そして、森林整備により出材された良質な広葉樹については、全国有数の取引市場である旭川銘木市に出品して、全国から集まる参加者の入札により販売しています。



旭川銘木市

【広葉樹の用途】

広大な大雪山国立公園の麓に位置する旭川市を中心とした東川町、東神楽町、当麻町一帯は、日本5大家具産地の一つに数えられる「家具の聖地」と言われています。

販売された広葉樹は、工場で丸太から板に製材され、長い年月を掛けて自然乾燥され周辺の家具工房等で加工されます。

この地域は、以前から豊かな自然と森林資源に恵まれ身近に良質な木材を使用できる環境から、家具製造が盛んな地域でしたが、近年では、職人と先端機械が織りなす高い技術力と「デザインの追求」が進められています。

初夏には、家具を中心としたデザインイベント「旭川デザインウィーク」を開催して、全国から多くの来場を得ています。



旭川デザインセンター

また、旭川周辺の家具メーカー約40社で組織する旭川家具工業協同組合は、北海道産材の活用を推進する「ここの木の家具・北海道プロジェクト」に取り組んでおり、現在は、約7割の旭川家具が北海道産広葉樹で製造されています。



旭川デザインセンター

北海道産広葉樹は、他にもジャパニーズウィスキーブームによる原酒熟成に必要なミズナラ樽としての需要、インバウンド増加によるホテル建設の調度品としての需要、学校等の非住宅分野における需要などがあります。



ミズナラのテーブル（北海道森林管理局1階）

こうした中、世界的な木材需給の変動やロシア・ウクライナを巡る情勢、為替の動向などの影響により、外国産広葉樹丸太の輸入が困難となるなど、地域産業の需要者からは、海外情勢の影響を受けにくい、北海道産広葉樹の持続的かつ安定的な供給を望む声が益々高まっています。

【今後の展開】

北海道森林管理局では、需要者が求める付加価値の高い用途向けの採材・仕分けによる市場への広葉樹供給に取り組んでいくため、これまでは紙製品の原料となるチップとして利用されていた中小径材の丸太についても、貴重な広葉樹資源を有効利用するため、より細かな仕分けを行うなど、ニーズを踏まえた市場供給する取組をこれからも進めて行きます。

なお、天然林にも広葉樹資源が少しずつ回復しています。一方、ササの繁茂等により公益的機能の劣化した箇所も多く生じています。こうした箇所の機能を回復させるため「樹群択伐天然更新施業」という伐採と更新補助作業を一体とした施業を試行しているところであり、その結果として生産される広葉樹材も持続可能な形で供給していく考えです。